

スターチス・シヌアータの促成栽培における夜冷育苗の開花促進効果

郡司定雄・*岩切吉勝・村田寿夫・高橋英生

(宮崎県総合農業試験場・*宮崎県庁農蚕園芸課)

Sadao GUNJI, Yoshikatsu IWAKIRI, Toshio MURATA and Hideo TAKAHASHI :

Effects of Cooling Treatment in Night with Seedling on Growth and Flowering of *Limonium sinuatum* Mill

スターチス・シヌアータでは、催芽種子の低温処理により開花が促進されるが、促成栽培では低温処理後の高温遭遇による脱春化を防ぐため、高冷地育苗や冷房育苗を行うことが必要とされている。これに代わる方法として種子冷蔵と夜冷育苗、夜冷育苗と苗冷蔵の組合せによる開花促進効果を検討した。この結果、慣行の苗冷蔵に比べて明らかな開花の早進化が認められたのでその概要を報告する。

1. 試験方法

市販の‘アーリーブルー’を用い、1988年7月1日に播種した。試験区は、60%減光の雨よけハウスで育苗した苗を本葉13枚時に苗冷蔵した区を対照として、種子冷蔵後夜冷育苗した区及び夜冷育苗後苗冷蔵した区を設けた。種子冷蔵は育苗箱に播種して1日催芽した後、2℃で30日間処理した。苗冷蔵区及び夜冷育苗後苗冷蔵区は7月1日に9cmポリポットに播種し、60%減光のハウスで育苗した。夜冷育苗は日中は60%減光の雨よけハウスで管理し、夜間(16:30~8:30)は10℃暗黒条件の夜冷育苗ハウスで管理した。

定植は9月20日、ビニルハウス内に40cm×30cmの2条植えとし、ポリフィルムマルチを行った。定植直後から1月31日まで電照を行い16時間日長とし、11月11日から最低夜温10℃で管理した。

2. 結果及び考察

定植時の苗は、苗冷蔵区が最も大きく葉数は13枚、夜冷育苗と苗冷蔵を組合せた区は8枚、種子冷蔵と夜冷育

苗を組合せた区は最も小さく7枚であった。抽台は苗冷蔵区が10月中旬から始まり、11月中旬までで60%の株にみられたのに対し、種子冷蔵と夜冷育苗を組合せた区は最も抽台が促進され10月上旬に67%の株で抽台がみられ、11月中旬には全株が抽台した。また、夜冷育苗と苗冷蔵を組合せた区でも抽台が早まり、10月中旬には40%、11月中旬には全株が抽台した。

採花本数は第2表のように、苗冷蔵区に比べ種子冷蔵と夜冷育苗を組合せた区及び夜冷育苗と苗冷蔵を組合せた区で増加がみられた。時期別採花本数は、両区とも1月までの採花数が増加した。なお、このうち種子冷蔵と夜冷育苗を組合せた区では11月から株当たり3本以上の採花があり、高い開花促進効果がみられた。

このことから、種子冷蔵による春化処理の効果が夜冷育苗によって保持されたものと考えられた。また夜冷育苗後苗冷蔵した区の開花促進効果も、苗冷蔵のみの区に比べ明らかに大きかった。

切花の品質は早い時期に切花長が短い傾向があり、また全期間を通してみた場合にも種子冷蔵と夜冷育苗を組合せた区及び夜冷育苗と苗冷蔵を組合せた区が苗冷蔵区より短い傾向がみられる点に問題がみられた。しかし12月以降は、ほぼ十分な切花長が得られ、その他の形質では、早進化による特別の問題はなかった。

以上のように、種子冷蔵と夜冷育苗を組合せると開花促進効果が著しく、スターチス・シヌアータの促成栽培の育苗に有利であると考えられた。

第1表 時期別抽台株率

(%)

区	月 旬	10			11			12			平均抽台日 (月・日)
		上	中	下	上	中	下	上	中	下	
苗冷蔵			13.3	20.0	46.6	60.0	80.0	86.7	93.0	100	11.16
夜冷育苗・苗冷蔵			40.0	73.3	93.3	100					10.24
種子冷蔵・夜冷育苗		66.6	80.0	86.6	92.3	100					10.9

第2表 時期別採花本数

(本/株)

区	月	11	12	1	2	3	計
		苗冷蔵	0	1.1	2.9	4.3	
夜冷育苗・苗冷蔵	0.8	3.4	6.6	4.9	5.2	20.9	
種子冷蔵・夜冷育苗	3.3	3.5	4.4	4.8	6.1	22.1	